
泡沫硝子

糸雨 冷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡沫硝子

【Nコード】

N1703BA

【作者名】

糸雨 冷

【あらすじ】

誰が・・・白雪姫だった？

白雪姫のようだ・・・そう称される18歳の魅織には、夫がいた。ただ魅織の夫は人間ではなく・・・。

*サイト掲載済

序

真つ暗な部屋の中。

ぱつとついた灯りに目がなれたとき、部屋を見渡してみると部屋の中央、豪華な椅子に座った男の姿。

艶やかな黒髪は長く、端正な顔立ちをした彼は高慢ともとれる不敵な笑みを浮かべている。

「やあ、よくいらしたね、お嬢さん。ここが・・・硝子細工の店と聞いてやってきた？」

確かにここでは硝子細工を扱っているが、そんなことはどうでもいい。

まずは俺の話聞くことが大切だ。」

そう言つて、彼は椅子から立ち上がる。

くるりと身を翻すと彼の動作にあわせて漆黒の髪が舞う。

すらりと伸びた、均整のとれた肢体。

背丈は異様に高く、髪の高さも腰ほどまである。

大男・・・と言つてもいいような身長なのにそう感じさせないのはきっと彼が華奢とも言えるほどに細身だから。

「お嬢さん、そう言つたのはただ単に俺がそう言いたかつたからであり、ここでは君のことなんて何も関係ない。

俺は語り手であるが、語るのは君の事ではない・・・ということだ。

「
いつの間にか彼は片手にティーカップを持っており、再び椅子に腰

を下ろしてそれを傾ける。
そして不適に笑い、問うのだ。

「君は、夢についてどう思う。」

夢、というのはどう意味だろうか。

問いの意味を理解しかねていると、彼は膝の上にティーカップを乗せる。

中身は、ミルクティのようだ。

「眠っているときに見る夢、将来の夢・・・夢という言葉聞いたとき、人はその二つを思い浮かべると思う。」

「ただ俺が言った夢は、その片方であり、また両方でもある。」

そう言つて彼は立ち上がり、ミルクティの入ったティーカップを椅子の上に置き、椅子の周りをぐるりと回る。

椅子の前に彼が再び戻ってきたときには椅子の上におかれていたティーカップは消え去り、そしてなぜか、椅子の左側に大きな鏡が現われていた。

アンティーク調の美しいつくりの、2メートルほどの大きな鏡。

突然現われたその不思議な鏡は、いくら覗き込んでも銀色の光を放つだけで何も映さなかった。

「その鏡が、不思議かい？」

その鏡に何も映らないのはごく自然なことであり、当たり前のことだ。

なぜならそれは、夢を見るための鏡なのだから。」

鏡にもたれかかっていた男は体を起こし、椅子に座る。

もちろん鏡は、男の姿も映さない。

「ここで扱っているのは泡沫硝子の夢。うたかたがらす

強制的に見てもらおうことになるのだが、料金を支払うか否かは見たあとに君が決めることだ。」

立ち上がった彼は椅子と鏡の後ろを通り、鏡の左側へと立つ。

2メートルほどあるだろうその鏡は彼と20センチも違わないだろう。

そのことから、彼の身長が180を超えていることを予測できる。

「君のために用意した泡沫硝子の名前は、幻御前だ。」

ゲンゴゼン。

まったくもって内容が予測できないその名前に首を傾げるが、これまでにわかったことがある。

ここはきつと・・・人に夢という名の幻を見せる場所なのだ。

そんなことを考えている間に鏡の表面に渦が現われ、私はそれに引き寄せられ・・・吸い込まれる。

「ああ、大切なことを言い忘れるところだった。

俺の名前は呼宝。こほう、という名前が泡沫硝子の夢からこちらに戻ってくる鍵だ。」

意識が鏡の中に堕ちていく。

まどろみの中視界には映らない彼の声が響く。

「さあ・・・よい夢を。」

自分しかいない部屋の中で、呼宝と名乗った男は呟いた。

そして長い髪を翻し、その部屋を出る。
部屋に残ったのは、大きなアンティーク調の鏡と・・・椅子の上に
置かれた一本の白百合のみ。

前編

真つ黒なその部屋には、相変わらず大きな鏡と椅子のみが置かれて
いる。

鏡の隣に置かれた豪華な椅子に座り、手の中の林檎をもてあそんで
いた黒髪の青年　呼宝こはつと名乗った彼は小さな声で歌を口ずさむ。

「あかあいいりんごをしゃくりとかじり、白雪姫は、死にいたる・・・
慌ててやってきた王子様は・・・。」

そこまで歌い彼は口を閉じ、手の中の林檎を見つめたあと、それを
一口かじる。

しゃくりと林檎は音を立て、食べられた分だけ欠けていく。
その林檎にはもちろん毒など入っておらず、呼宝が白雪姫のように
倒れることも、死にいたることもない。

そして呼宝は、自分のかじった林檎を見て、静かな声で呟いた。

「だけど王子様は人間であった白雪姫とは違い、人あらざるもので
あった。」

白雪姫はそのまま死の世界へと堕ちてゆき、人でなかった王子様は
その場に立ち尽くすことしかできなかった。」

それが、幻御前の泡沫硝子である。

俺の知る白雪姫は、絵本にでてくる白雪姫と同じような特徴を持つ俺の友人である。

黒檀のように黒く美しい髪は長く、緩やかに波打って彼女の華奢な背を流れる。

雪のように白い肌は一点の曇りすらなく、陶磁器のように滑らかで血のように紅い唇はみずみずしく潤い、白い肌の中で色づく。

幼い頃に両親をなくした彼女は遠縁である俺の家に引き取られ、俺と彼女は兄弟のように育った。

だけどここの泡沫硝子は幻御前のものであり、白雪姫に似た彼女のものではない。

幻御前・・・そう呼ばれるものは男であった。

だけど彼は人間ではなく、俺の家に古くから住む・・・なしきわらし座敷童とい

う妖怪だった。

160にも満たない背丈。

肩ほどまである黒髪は伝承の中での座敷童のように切りそろえられたおかつぱということもなく。

男にしては愛らしすぎるその顔立ちも立ち振る舞いも普通の子供と大差なく、座敷童だと彼が言わない限り、誰も気づかないだろう。

手を繋げばぬくもりがある。

肌に触れば人と同じ感触がして、人と同じように心が・・・喜怒哀楽がある。

食事や睡眠を取らずにいることもできるらしいが、彼は俺たちの前では人である俺たちと同じようにあることを心がけ、行動してくれた。

俺たち人間と彼という座敷童の違いは、成長するかしないか・・・死ぬか死なないかの二つだけでしかなかったのに、どうすれば思いが止められたというのだろう。

幻御前と呼ばれる座敷童、彼は自分の名を優魅ゆうみであると言った。

そんな彼を白雪姫に似た容姿を持つ彼女・・・魅織みおり　　ミオは愛してしまっただ。

死ぬことも、老いることもない男を。

「ねえ呼宝、知ってる？」

不老不死を望むのは、その本当の意味を知らない愚か者だけなんだよ。

老いることも死ぬこともないというのは、ひどく異常で、異端で、悲しいことなんだよ……。」

優しい朝の光が差し込むその時刻、私は優しい旦那様の声で目を覚
ます。

「ミオ・・・ミオ・・・魅織、起きて・・・朝だよ。」

重たいまぶだを開けると視界の先に優しく笑う、旦那様の姿。

私、魅織は若干18歳にして目の前の彼・・・優魅の妻である。

そしてわたしの旦那様である彼も中学生にしか見えないほどに幼い
容姿をしているが、その年齢を見た目で計ることなんてできやしな
い。

彼は、不老不死の座敷童だから。

「ミオ、今日は天気がいいから外で朝食食べようか。」

そう言つて優しく笑う、愛しい人。

何も心配することなんてありやしない。

例え彼が不老不死の座敷童で、例え私の身が一年にも満たぬうちに
朽ちてしまおうとも・・・それでも私は彼を愛していて、彼は私を
選んでくれた。

未来なんて誰にも予測できないこと・・・明日の自分を100%保
障できる人なんていないのだから、私にとって何も心配することな
らなかつた。

彼に出会ったあの頃・・・私は今とは違い、健康体を持つ普通の少女で、彼は今と変わらず年齢不詳の不老不死の座敷童だった。

冷たいように見えてさりげない優しさを持った、人に無関心な風を装いながら周りに気を配れる人だった。

彼の隠された一面に気づくたび、私は彼に惹かれていった。

気がついたときにはもうどうしようもないくらいに彼が愛しくて・・・
・恋はするものじゃなく墮ちるものなのだと、彼に出逢って初めて知った。

最初で最後の、最愛の人。

「何一人で笑ってるの？」

私が座る車椅子を押しながら、小さく笑みを零した私に彼は聞いてくる。

細くてさらさらの黒髪が私の顔を覗き込んだ彼の動作に合わせて揺れる。

私の癖のある黒髪とは違った、まっすぐでさらさらの髪。

とても・・・キレイ。

「何もないわ。ただ少し・・・昔のことを思い出しただけ。」

『シラユキヒメ』という物語を俺は彼女に出逢うまで知らなかった。

もともと異国の物語だというし、俺は呼宝に出会って魅織に出逢うまで、人とは関わらないように・・・そして不老不死の座敷童である自分の存在が明らかにならないようにしていたから。

以前宿っていた家がなくなり、新たな家を探していたとき、ふと目に付いたその洋館。

昔ながらの日本家屋にばかり座敷童は棲むと思われがちであるが、大事に人が暮らしている建物はどんなものであり座敷童にとって心地いいものなのだ。

ふらりと立ち寄り、棲みついた些か冷めた雰囲気の父子が住むその洋館に彼女がやってきたのは、俺がそこに隠れ住んでどれくらいだった頃だったろうか。

何年目かは覚えていないが、その頃にはすでに、人でないものを見つめる力に長けていたその洋館の一人息子・・・呼宝に俺の存在は知られ、何気なく寄って来る呼宝と友人のような関係になっていた。

「この子、ミオって言うんだ。それで、こっちは優魅君。うちに棲んでる座敷童さんだよ。」

今よりもずっと幼い声でそう言った呼宝の声を、俺はそのとき心あらずといった調子で聞いていた。

俺の中の何かが、変わる音がした。

後編

日増しに私の身体は弱りはて、ベッドからでることすらままならなくなつた。

それでも優魅は以前と変わらず私に優しく、代わらず私の部屋に毎日綺麗な花を生けてくれる。

……私は彼に、妻として何も返せないのに。

「ミオ、今日は天気がいいから少しだけ窓……開けようか。」

私の病状がどれだけ悪化しようと代わらず優しい貴方。

愛想を尽かすことも同情することさえなく……もうすぐ死んでしまう私を妻にしたこと、後悔している素振りさえ見せない。私は貴方を愛してる。貴方が私を確かに愛してくれていることもわかつている。

それなのに、私は貴方がわからない。

座敷童の幻御前。

人あらざる……幻の、妖しの存在。

その姿は年老いることなく、永遠に美しい人形のように。

だけどそんな彼も、時々笑うようになった。

だんだんに……近くなってきた。

それでもまだ、彼には一つだけできないことがある。

幻御前は……座敷童は、泣けない。

「ミオが、意識を失った。」

優魅が少しばかりの買い物から帰宅すると、深刻な顔をした呼宝が彼に告げた。

それを聞いた彼はいつもと変わらない様子で黒目勝ちの瞳を数度瞬きさせる。

「容態は？」

そんなもの聞かなくても、呼宝の深刻な顔から予測することだってできる。

それに魅織はいつ亡くなってもおかしくないほどに、その身体は弱っていたのだから。

それでも聞いたのは・・・聞きたくなかったのは、きっと優魅が否定の言葉を望んでいたから。

「今夜が、峠らしいよ。」

「そう。」

いつもと変わらない、抑揚のない物言いはこんなときですら変わることなく。

変わり続けるヒトとは違う彼を、呼宝は悲しく思った。

優魅は手に持っていた買い物袋の中から林檎をひとつ取り出し、残りが入った袋を呼宝に押し付ける。

「もうミオは、林檎なんて食べられないと思うけど。」

袋の中にはたくさんの林檎が入っていて、その中からひとつ取り出し、かじる。

林檎はしゃくりと音を立てて欠け、呼宝の口の中に甘い味が広がる。

甘い甘い、蜜林檎。

アダムとイヴが食べた、禁断の赤い果実。

「俺が食べるんだから、別にいいんだよ。」

魅織や呼宝と一緒にのときでないと進んで食べることをしない優魅の珍しい言葉に呼宝は目を丸くする。

「ヒトにとって、林檎は禁断の果実だったそうだね。」

ヒトに知恵を与え、恋を教えた禁断の果実。

林檎がヒトにとっての禁断の果実なら、座敷童にとっての禁断の果実・・・それがなんだったか、知ってる？」

その答えは、きっと白雪姫が知っている。

その静かな部屋に、彼の声が響く。

黒檀のように黒く美しい髪と、雪のように白い肌と、血のように紅い唇の娘を・・・と、

望んだお妃様がおりました・・・。

生まれた娘はお妃様が望んだとおりに美しく、白雪姫・・・と呼ばれました。」

手に持った絵本に黒い瞳をむけていた優魅はそこまで読んだところでパタンと音を立てて本を閉じ、自分が座る椅子の傍らのベッドで眠るミオに視線を向ける。

「ねえ、ミオ。白雪姫は林檎を食べて死んでしまったというけれど、やっぱり俺は・・・林檎は禁断の果実だったと思う。だって何も知らなかった白雪姫は、林檎を食べて恋を知ったのだから。」

白雪姫の食べた毒林檎。

彼女を殺すために用意されたそれは、彼女が王子様に出逢い、恋に堕ちる材料となった。

少女でしかなかった白雪姫は、林檎を食べて恋する女へと変わった。

「恋を知らなかった白雪姫が林檎を食べて恋を知ったというのなら、恋を知らなかった座敷童は・・・なんで恋を知ってしまったの？」

ふと聞こえた愛しい人の声に、優魅はゆっくりと微笑む。

視線の先には漆黒の双眸でこちらを見つめる、優魅の愛しい白雪姫。

「何でだと思っ？」

質問に質問でかえってきたことに、魅織は愛らしい顔を不機嫌そうに歪める。

そんな魅織を、優魅は先ほどと変わらない微笑みで見つめる。

「聞いているのは私だわ。」

少しばかり怒ったような、拗ねたような彼女の言葉に優魅はまた小さく笑う。

きつと優魅にとって、”笑う”ということも禁断の果実を食べてできるようになったことの、ひとつ。

「君が俺にとって、白雪姫じゃなかったから。」

まるで理解できない答えに、魅織は首をかしげる。

優魅はもう自分では動かせないだろう彼女の手を取り、その上に優しく、紅い林檎をのせる。

一口だけかじられた、禁断の果実。

「みんながミオを、白雪姫に似てると言った。

紅い果実を食べ恋を知った、あのお姫様に。」

黒檀のように黒く美しい髪、雪のように白い肌と、血のように紅い唇を持つ、端正な顔立ちの少女。

彼女を知る人は皆、口をそろえて白雪姫のようだと言った。

だけど優魅は、男である自分が黒檀のような漆黒の髪と雪のように白い肌と・・・血のように紅い唇を持つことを知っていた。

だから優魅は、魅織がそれに似ていることに知った。

「紅い、禁断の果実。

魅織が俺と言う白雪姫にとっての禁断の果実だったから、俺は君に出逢って恋を知った。」

ゆるり、ゆつくりとした動作で優魅の雪のように白い手が魅織の雪のように白い肌を滑る。

まっすぐ伸びた優魅の髪は黒檀のように黒く美しく、魅織の目の前で笑みを形どるその唇は血のように紅い。

白雪姫のようだと言われた魅織が愛した座敷童もまた、白雪姫のようで……。

もう動くこともできない魅織に優魅は満面の笑みを浮かべ口付けた。

「座敷童の愛した、愛しい愛しい林檎姫。

君に出逢って俺は恋を知り、人を知り……そして幸せの意味を知った。

俺を幸せにしてくれてありがとう。」

灰色の煙は空へ向かい、いくら座敷童であろうともそれを繋ぎとめることなんて優魅にはできない。
手を伸ばしても煙は気体なのだから、優魅の小さな手の中に収めることはできない。

子供のような・・・小さな座敷童の手のひらは小柄だった魅織の手と幾分の差もなく。

彼女はおそろいだと笑ったが、彼女に出逢って初めて優魅が大人になりたいと望んだこと、魅織は知っていただろうか？

160にも満たない小さな子供のような、女の子のように華奢な体ではなく、魅織の小さな身体を包み、全てのものから守りたいと思っていただなんて・・・無いものねだりが過ぎて、優魅にはとても口には出せない。

林檎姫、齧ることの許されない・・・禁断の果実の女の子。

ふわふわと揺れるその黒髪が愛しくて、穏やかに微笑む白い笑顔が眩しくて、優魅の名を呼ぶ紅い唇に囚われた。

座敷童が持ち得ないはずのその恋心は、紅い林檎の少女に手を伸ば

したときには、きつともうそこに存在していた。

花に埋もれ、炎に抱かれ・・・そして灰になった彼女を小瓶につめて、少しだけでもらってきた。

彼女は墓の中に行ってしまったけど、夫である優魅と一緒にそこに入る日はきつと来ないから。

半透明の、紅い小瓶。

その中にいるのは、愛しい愛しい優魅だけの林檎姫。

どれだけ長い悠久のときを彷徨おつと、優魅は彼女のことを忘れな
いだろう。

「おやすみ、魅織。」

紅い小瓶に小さな口付けと一滴の涙^{ひとしずく}。

『あのね、優魅。私も貴方に逢えて、とてもとても幸せだった。』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1703ba/>

泡沫硝子

2012年1月4日10時45分発行